



研究紹介

水稻‘西海232号’の施肥管理

作物部作物グループ 安達 康弘

本県では平成17年から早生の‘西海232号’を奨励品種に採用し、栽培を開始する予定です。そこで、‘西海232号’の高品質、安定生産に向けて、適切な窒素施用方法を検討しました。

基肥及び中間追肥の窒素施用量

基肥、中間追肥とも施肥量が多いほど穂数が増加する傾向が認められましたが、増収効果ははっきりしませんでした。これは、倒伏の影響も考えられます。品質面では、基肥3～4kg/10a、中間追肥0～1kg/10aが乳白粒の発生がやや少なく、品質がやや良いと考えられました。(表1)

表1 基肥・中間追肥の窒素量が生育、収量、品質に及ぼす影響(平成16年)

基肥-中間追肥	成熟期		収量 (kg/10a)	玄米品質 (1~9)	乳白粒率 (%)	
	稈長 (cm)	穂数 (本/m ²)				
3-0	81	332	2.0	533	5.0	3.8
3-1	84	357	2.5	541	5.3	4.0
3-2	85	383	3.0	545	5.5	4.4
4-0	81	359	2.5	515	5.3	2.4
4-1	85	361	3.0	549	5.3	4.1
4-2	85	395	3.5	546	5.8	4.4
5-0	85	373	3.5	544	6.3	4.4
5-1	85	381	3.0	519	6.0	4.5
6-0	87	391	3.5	541	6.3	5.7

注) 玄米品質は1(上上)～9(下下)の9段階。
 穂肥は出穂前25・10日前に各2kg/10a施用。
 移植5/18、出穂期8/13～14、成熟期9/26～27。



図1 ‘西海232号’の生育(平成16年)

穂肥の施用時期と窒素施用量

施用時期は出穂20日前～10日前が、倒伏がやや小さく収量が多いため、適当であると考えられました。玄米の外観品質は出穂20日前と10日前に各1.5kg/10a施用した区が最も良質でした。(表2)

表2 穂肥の窒素量、施用時期が生育、収量、品質に及ぼす影響(平成16年)

施用時期 (出穂前日数)	穂肥窒素量 (Nkg/10a)	成熟期			収量 (kg/10a)	玄米品質 (1~9)	乳白粒率 (%)
		稈長 (cm)	穂数 (本/m ²)	倒伏 (0~5)			
25-10	1.5-1.5	84	385	3.5	528	6.3	5.6
25-15	1.5-1.5	84	407	4.0	538	6.3	8.1
20-10	1.5-1.5	83	387	3.0	543	5.5	6.0
25-10	2.0-2.0	86	395	4.0	465	7.0	7.8
25-15	2.0-2.0	83	384	3.0	522	6.5	6.4
20-10	2.0-2.0	83	376	3.0	536	6.5	6.9
25-10	2.5-2.5	86	393	4.0	501	7.3	8.1

注) 施用時期、穂肥窒素量は、1回目～2回目で表示。
 基肥は4kg/10a、中間追肥1.5kg/10a。
 その他は表1と同様。

まとめ

この試験課題は平成17年度まで継続しますので、暫定的ではありますが、表3の窒素施用方法が適当と考えられました。今後とも‘西海232号’の高品質・安定生産に向けて検討していきます。

表3 ‘西海232号’の窒素施用量(Nkg/10a)と施用時期の目安

基肥	中間追肥	穂肥		計
		出穂20日前	出穂10日前	
3~4	(1)	1.5~2	1.5~2	6~8

()は肥沃度が低い水田で分けつ盛期から葉色がうすくなった場合に施用する。